

フィリパ・ピアスに会いにでかける

甲南女子大学教授

島 式子

ピアスの『トムは真夜中の庭で』（高杉一郎訳／岩波書店）の中で、トムがハティと庭園の時間を共有したのはヴィクトリア朝、私たちがこの「時のファンタジー」を手にしたのは二十世紀の半ば、そして二十一世紀の現在、イギリスは「ハリー・ポッター」を発信し、ブルマンのシリーズや『指輪物語』の映画が、本から遠ざかっていた層に入り込んできた。最近イギリスで出た、イギリスの児童文学作家ガイド『ベアトリクス・ポッターからハリー・ポッターまで』にはピアスが載っている。イギリスの児童文学でピアスが入らないことはまずないのだが、まさかという事態が起きている。この本にはあのフアージョンが出ていない。「フアージョンをとりあげない本を私は信じない」。そう言い切ったのはピアスである。

フィリパ・ピアスは、時と人間の探究家としてイギリス児童文学の根幹を支えながら、幽霊を素材とした短編の高手としても知られる。第一番目の長編『ハヤ号セイ

川をいく』（足沢良子訳／講談社）では、ピアスは川の流れ（命の流れ）に沿って立ち、自然と人間を観察するカメラの焦点を合わせながら、夏の日々、少年たちの遊びと冒険をつたいあげた。BBCで教育番組制作のディレクターの仕事しながら、ストーリーテリングを実践した体験は、物語づくりの核の部分になっている。長編第二作目の『トムは真夜中の庭で』は、時の切なさや愛の物語を館と庭を舞台に繰り広げたファンタジーの最高作品とも呼ばれる。『まぼろしの小さい犬』（猪熊葉子訳／岩波書店）では、下町の男の子が犬を飼いたいと願う気



持ちと現実を観察、描写して、「子どものかかえる孤独」の淵にせまった。最も新しい長編『サティン入江のなぞ』（高杉一郎訳／岩波書店）では、行方不明の父親を求めて入江に自転車走らせる少女の姿を、古い土地、人間の記憶のイメージの中に蘇らせながら、少女を主人公にして、母、祖母を繋ぐ女性の物語を拓いた。いずれの作品でも、窓枠の中の物と人間が観察され、確かな筆致で書き記されるとき、イギリスの文化、階級、土地に生息するあらゆる生命が時間の髪を重ねて動き始めるのだ。

ピアスの作品を読み返す機会に恵まれたこの春、ピアスに、いま、会わなければという気持ちに突き動かされた。昨年二月にヴァージニア・ハミルトンがオハイオで亡くなり、一月には上野瞭が逝ってしまった現在、ピアスに会ってその記憶を辿って生の声を自分の耳に残したい、そんな思いでケンブリッジに向かった。その日はイギリスの三月には珍しく暖かく、空が青く澄み、光の舞う美しい日だった。ピアスの幼少時、兄弟たちが川遊びに興じたキヤム川の水面は、限りなく青い。流れは速く、ここで少年たちがボートをこぎながら叫んだ元気で力強い声は、おそらく川の流れの音と共鳴しただろう。現在ピアスが住まいする土地は、生まれ故郷であり、祖父、父親が営んだ製粉業の場所でもある。時は移り、トムの

舞台となった館も庭園も、代を重ねたミルも現在は人手に渡っている。かつての小作人が住んでいた可憐なセミデタッチト（一棟に二軒入る二戸建て住宅）の家。そこがピアスの終の棲家である。隣に娘の一家が引っ越して、ピアスをサポートする。家の玄関までは低いフェンスからほんの二、三メートルで、小さな庭にはスノードロップや、わずかなクロッカスが風に揺れていた。呼び鈴の音に反応するのは、犬の鳴き声。裏の広大なバスチャーヤ川を先に見て、せまい小路にひっそり佇むピアスの家への入り口で、三時にいらしてという手紙を手に、はむ気持ちはおさえて立った。

「犬は大丈夫？」「ええ、大好きです。家で飼っていますから。」「えっ？？日本人って犬を飼うの？」

えっ？東京を訪問されたとき、おおよそ日本の暮らしや生活は眼に入らなかったにちがいない。

「種類は？」「柴犬。」「柴犬ってどんな犬？毛は長い？短い？大きさは？」



『まほろしのちいさい犬』の中で、少年が飼いたい犬の種類を図書館で調べる場面があるが、知りたい、興味があることに、作家からの質問は矢のように飛んでくる。「はじめまして」と柔らかい手をそっと握り締めた数分後、私たちは日本犬の説明にやつきになり、犬仲間というパスポートが真っ黒のラブラドル犬にも、サンルームに寝そべる難聴の猫にも歓待される訪問となったのは、なんと幸運だったことだろう。居心地のよい、ウイリアム・モリスのデザインがところどころに配置された居間、犬のかごをわきに、ピアスに入れてもらうティーセツトのお茶の時間は夢のようではあったのだが、ピアスの問いかけに答えるほうがスリリング、という思いがけない時間が始まった。

「家族の仕事は?」「何を勉強しているの?」「子どもたちは将来なにをしたいの?」「レオン・ガーフィールドを知ってるって?」「あの人がガーデニングが得意ですって?」「うそ、うそ!あの人は生粋のストーリーテラーよ。植物なんて。京都でアンティークを買ったって?」「彼はアンティークには、目利きだったわ。」「そうそうラッセル・ホーバンを知ってるわよねえ。あの二人ときたら。本当におもしろい人たちだったのよ。毎月決められた日に、決められたレストランで、決められた

を仔細に語ることを、また自信と呼べるものを著してこなかった女性である。インタヴューで、どれほどのことにふれることができたのだろう。ピアスは私がかじめ送っていた手紙を手に、的確にユーモアを交えて長時間語り続けた。名前の由来、五歳で腎炎を患い小学校入学は八歳。母親に読み書きを習い、兄妹たちはゲームをして遊んでくれた家族との幸せな日々。健康保健制度が完備していない時代の莫大な治療費のこと。母親はこのほか赤毛の末っ子をかわいがり、(ピアスは赤毛だったのだ)天使のような赤毛の水彩画が残っている。姉も兄も知的で有能な人たちであったことが、ピアスの言葉のはしほしに窺がえる。やがてピアスは私たちが知る作家として作品を発表、ストーリーテラーとして現実の子どもたちと接する時間も多くなった。その間、高齢出産で授かった娘を(夫を子ども誕生後わずか二か月あまりで亡くしたことは知られている)一人で育てるため、サリー州からロンドンに戻り作家生活を送ることになる。「作家の私は、それは恵まれていたわよ。だって一日中赤ん坊と過ごして、赤ん坊の様子をみて、十分に遊んで。七時にあの子が眠る。それから夜にかけて仕事をしたのよ。私の生きてきた日々なんて、それは普通で、特にこれといったことなど何にもなかったんだもの。

メニューを一人で食べることにしていたの。私たち三人よく話して、よく笑って、いい友達だった。ガーフィールドが亡くなったとき、奥さんは彼の遺言通りにウィクトリア朝のお葬式を出したのよ。いろいろなことを思い出すわ。」

私は、いったいいつからこの人と一緒の時間を過ごしているのだろう。犬も猫も、亡くなったガーフィールドをも、ピアスはその活力で蘇らせて、この居間は輝いている。「インタヴューを始める前にミルを見にいったほうがいいと思うわよ。暗くなったら、つまらないでしょう?」

私たちは裏木戸から出かけ、わずかの距離をゆったり時間をかけてトムの館を通り、川岸に着いた。四階建ての古い屋敷が川をまたいで建ち、いまはもう撤去されたという。川は深く、流れがあり、いきなり飛び込んだ犬がすばやく水から上がり、水を切ろうと身構える。鋭く叱るピアスの声におかまいなく、水しぶきをまき散らす犬の回りに光が舞い、濃いピンク色のアーモンドの花が咲き乱れていた。

ピアスは、他の多くの作家たちと異なり、自らの生涯

ただね、私は本当に幸運者だと思っている。」

このままこうしてずっと、記憶の紡ぐ物語を聞きたいと心の裡で呟いていた気がする。しかしピアスに情緒的な感覚は似合わない。

「私のような異星人、エイリアンが書いた作品が、言語体系のまったく異なる日本でどうしてこんなに読まれるのか、私のほうが不思議よ。ほとんど奇跡よ。」

真つ暗になつた戸口で、私はピアスをしつかり抱きしめた。バーソロミューおばあさんと固く抱き合ったトムの心境だったといつても、うそはない。ピアスの眼は、本当に少女ハティそのままだったからだ。

